平成３０年７月１１日

智頭町議会議長　谷口　雅人　様

同和問題調査特別委員長　國本　誠一

委 員 派 遣 報 告 書

本委員会の調査事件について委員を派遣したので、智頭町議会会議規則第７７条の規定により、下記のとおり報告します。

記

１．期　　日
平成３０年６月２８日（木）、２９日（金）

２．場　　所
（１）米子市末広町２９４　　「米子コンベンションセンター」
（２）米子市角盤町２丁目６１「米子市公会堂」

３．目　　的
社会に存在する具体的な人権問題やその解決策についての理解を深め、今後の議会活動及び議員活動に資する。

４．派遣委員
全委員１２名

５．内　　容
部落解放・人権　西日本夏期講座

６．所 感 等
「鳥取県の障がい者差別解消の取り組みについて」
「あいサポート運動」という言葉は、今では多くの所で聞くが、鳥取県発祥であり、「障害者差別解消法」よりも先にスタートした取り組みであることを知った。
「あいサポート運動」とは、障害者権利条約の合理的配慮などの理念を実践するため、多様な障がいの特性、困っていること、必要な配慮などを理解し、障がいのある方に対するちょっとした手助けや配慮を通じて、障がいのある方が暮らしやすい地域社会を県民とともにつくる運動のことである。

具体的な取り組みの一例として、鳥取県手話言語条例を全国初で制定し、学校や職場、地域で手話の普及を推進している。また、「手話を広める知事の会」も発足し、その取り組みは全国にも広がりつつある。

さらに、聞こえる人の声を文字に変換し、タブレット型端末の画面上に表示する音声文字変換システムを、県庁総合受付やＪＲ主要駅、バスターミナルなどの窓口に設置して、伝える手段の工夫もされている。

また、障がい者を支援するだけでなく、文化芸術やスポーツ、地域での交流においても障がい者の活動を推進している。

鳥取県に住んでいると、あいサポート運動もユニバーサルデザン化も身近なことで当然のように感じていたが、今回の講演を聞き、鳥取県は共に生きる社会を積極的に創造していることを知り、県民として誇りに思うと同時に、本町においても、障がい者の方が暮らしやすい町づくりを推進していくよう、取り組みたい。

「ハンセン病問題から学んだこと　若者たちの声」

広島県福山市にある盈進中学高等学校、ヒューマンライツ部に所属する学生が発表された。ヒューマンライツ部は、ボランティアと平和と人権に関する調査・研究を行うクラブで、「手と手から～中高生として地域や国際社会の平和と人権の環を広げるために貢献する～」を活動テーマとしている。

活動の一部を記載すると、2013 年度「全国中学生人権作文コンテスト」において、当時中学１年生の後藤泉稀さんの作文「NO!と言える強い心をもつ～ハンセン病問題から学んだこと～」が法務大臣賞を受賞。その作文をもとにした教育映画「こんにちは金泰九（キムテグ）さん～ハンセン病問題から学んだこと～」が制作され、各地の人権集会などで上映されている。

また、１０年間続く「核廃絶！ヒロシマ・中高生による署名キャンペーン」の実績が認められ、2014 年、15 年にニューヨーク国連本部、17 年はウィーン国連事務局、18 年はジュネーブ欧州国連本部と４度、外務省「ユース非核特使」として国連に派遣され、「被爆地ヒロシマ」の核廃絶の魂を英語でスピーチされるなど、国際的にも活躍されている。

この度の講演では、主にハンセン病問題に関して発表された。

まず、ハンセン病とは、らい菌によってひきおこされる感染病で、不治の病として昭和４年には、各県が競ってハンセン病患者を見つけ出し、強制隔離する「無らい県運動」が全国的に進められた。また、昭和６年に従来の法律を改正し「らい予防法」を成立させ、国立療養所を全国に配置して、在宅の患者も療養所に強制入所された歴史があることを紹介。

ヒューマンライツ部は、ハンセン病を学ぶにあたり、実際に瀬戸内にある離島の長島にある国立ハンセン病療養所に行き、入所されている方々から直接聞き取りも行い、冊子も作製。

講演では「こんにちは金泰九さん」の一部が上演された。そこには、金泰九さ

んのほか、療養所内で生活する入所者から直接部員が聞き取りしている様子も映し出されているが、みんな笑顔で交流しているのが印象的だった。そして、治る病気を不治の病とし、強制隔離され、名前も奪われ、子どもを産むことも許されず、一生を療養所で過ごすことを強要された入所者の方々の心情を知ろうと努力し、この病気の偏見や差別をなくしていく行動が映し出されており、心を打たれた。

国が誤った判断のもと、強制隔離する施策をとったことに驚きを感じるが、その後、不治の病ではないことがわかってもなお、人々は偏見や差別を続け、意識へのすり込みは恐ろしいものがあることも再認識した。これは同和問題をはじめ、あらゆる差別にも潜んでいる意識だと思う。

実態を知る努力を行い、偏見や差別がある事象が起こった際には、傍観者にならず、その解消に向け積極的に取り組んでいきたい。